

中学校音楽科の鑑賞授業における「聴く」

—教師の意識に着目して—

田 口 有 志

(広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期)

“Listening” in Music Appreciation Classes in Junior High Schools: Focusing on Teachers’ Attitudes

Yuji TAGUCHI

Abstract

The word “appreciation” encompasses various activities such as “listening,” “watching,” and “feeling.” In music appreciation classes, various activities such as listening to sound sources and watching images are conducted. Subsequently, it is important to determine how the teachers who conduct these “appreciation” classes view these classes. This study aims to clarify how “listening” is perceived by teachers in music appreciation classes by analyzing their attitudes toward such classes. An open-ended questionnaire survey was conducted in public junior high schools in Hiroshima Prefecture; the collected data were analyzed by using the KJ method. The results of the survey revealed that students and teachers engage in four types of “listening”: (1) analytical “listening” focusing on the elements that form music, (2) repetitive “listening” in class, (3) intensive “listening” that excludes visual information, and (4) “listening” as an ability that the students aim to develop in the appreciation class.

1 はじめに

日本の音楽科における鑑賞授業は「教師が作品に対する解説を行い、その後 CD を鑑賞、子どもたちが鑑賞した楽曲作品に対して感想を記述するという学習パターン」(今 2013, p.49)が多く、楽曲作品の言語化が授業のゴールとして設定されている。学習指導要領において、適切な言語活動の位置付けが求められるなど、音楽の言語化が現在の音楽科授業において非常に重要視されている一方で、鑑賞授業の目的が楽曲作品の言語化に終始しているのではないだろうか。

この要因として、「鑑賞」という語の曖昧さがあると筆者は考えている。「鑑賞」という語は「聴く」「観る」「感じる」など、様々な行為を包含した語である。音楽科の鑑賞授業でも、音源を聴く活動、映像を観る活動などの様々な活動が行われているが、それらを全て「鑑賞」という枠組みで捉えている。では、こうした「鑑賞」授業を教師はどのように捉えているのだろうか。そこで筆者は鑑賞授業に対する教師の意識に注目した。実際に授業を行う教師が鑑賞授業を通して生徒にどのような能力を身につけさせようとし、授業内でどのような工夫をしているのか、といった教師の意識を分析する中で、教師の鑑賞授業観を明らかにすることができる考えたためである。しかし、鑑賞授業観では大きな捉え方しかできないため、本稿ではその中でも「聴く」の捉え方に着目する。

「聴く」は音楽鑑賞の中心的な活動である一方、対象や方法によって様々に分類される。阪井(2006)は「音自体を聴く」ことの重視に、どのような意義があるか(p.110)を検討し、小川ら(2014)は「特定の音楽的語法を身体化するためのツールとして、アクティブなアクションを含んだ「聴く」ことが必要」(p.5)と述べているように、音楽鑑賞における「聴く」も多岐にわたる。こうした多様な「聴く」のうち、

鑑賞授業において教師が求める「聴く」とはどのようなものなのだろうか。

よって本稿では、中学校音楽科の鑑賞授業における教師の意識の分析を通して、「聴く」がどのように捉えられているかを明らかにすることを目的とする。

2 「聴く」の言語的な意味

音楽を「きく」を漢字で表記する場合、多くは「聴く」と表記され、「聞く」や「訊く」が使用されることはあまりない。こうした表記にはどのような違いがあるのだろうか。

穂田 (2009) は日本語の「kiku」について、語源的には分類ができるが定義は難しいとして、International Listening Association (ILA) の「きくこととは、音声言語、及び非言語情報を受信し、それに意味づけをし、反応するプロセス」(原文英語、訳は穂田によるもの)を「聴く (Listening)」の定義とし、その他を以下のように述べている。

「聞く」は単に音の刺激を受けること、例えば、人の声や車の音、鳥の声や川のせせらぎなど、聞こえてくる音をそのまま耳で感じ取ることである。「訊く」は「質問する」という意味だけでなく、聴いている際に「なぜそう言えるのか」「本当に言いたいことは何なのか」などと、自己に問いかけながら聴くことである。(p.99)

この定義をまとめると表1のようになる。

表1 「聞く」「聴く」「訊く」の定義

聴く	音声言語、及び非言語情報を受信し、それに意味づけをし、反応するプロセス
聞く	単に音の刺激を受けること
訊く	自己への問いかけを含んだ質問

(穂田 (2009) の研究をもとに筆者作成)

この定義を踏まえて音楽を「聴く」という表記について考えてみる。「聞く」や「訊く」ではなく、「聴く」という表記が多く用いられている背景には、音楽聴取を単なる音の刺激の受容として捉えるのではなく、それに意味づけをし、反応するプロセスまで包括して捉えてきた認識があると考えられる。

3 調査概要と結果

(1) 調査概要

広島県内の公立中学校を対象として質問紙調査を行った。調査概要は表2の通りである。質問紙は郵送で送付し、紙面による回答もしくは Google form による回答を求めたところ、51名の回答を得た。

(2) 分析方法

質問項目ごとに「データをして語らしめる」(川喜田 1986, p.15) ことを目的とした KJ 法におけるグループ分けの手法を用いて分析した。グループ分けの具体的な手順について質問1を例に挙げて説明する。

まず、「どんな曲についても興味、関心を持って鑑賞できると良いかなと思っています。」という回答を「興味、関心を持って鑑賞」とするように、各回答を簡潔に要約した付箋を作成した。次に、似た回答を組み合わせる小グループを生成し、ラベルをつけた。「興味、関心を持って鑑賞」は生徒の興味関心や意欲についての回答と組み合わせる小グループを生成し、[意欲]というラベルをつけた。その後グループ分けとラベル作成を複数回行い、さらなるグループ分けが行えなくなった時点で分析を終えた。

1つの質問項目に対して複数回答がある場合は別回答とみなし分析しているため、質問項目によって回答数が異なっている。分析結果では回答数を示している。また、グループ生成においていずれのグループにも分類できなかったものは分析結果の図に表示していない。

表2 アンケート概要

対象	広島県内の公立中学校 音楽科担当教師
調査時期	2021年7月3日から2021年8月31日
調査方法	自由記述式の質問紙調査
質問項目	<p>①鑑賞授業で生徒にどのような資質・能力を身につけてほしいですか。</p> <p>②鑑賞授業を実際にどのように行っていますか。</p> <p>③鑑賞授業の構成について意識していることは何ですか。</p> <p>④鑑賞授業で用いる教具や音源・映像について意識していることは何ですか。</p> <p>⑤鑑賞授業における授業法・指導について意識していることは何ですか。</p> <p>⑥歌唱や器楽，創作の授業と比較して，鑑賞授業にどのような良い点があると思いますか。生徒側の良い点，教師側の良い点の2つの視点から回答してください。</p> <p>⑦歌唱や器楽，創作の授業と比較して，鑑賞授業にどのような課題があると思いますか。生徒側の良い点，教師側の良い点の2つの視点から回答してください。</p> <p>⑧音楽科の授業において鑑賞授業をすることにどのような意義があると思いますか。</p>

(3) 分析結果

「聴く」に関するグループが生成された質問1, 3, 5, 6, 7, 8の結果を示す。グループのラベルには階層があるため、本稿では上位ラベルを【 】，中位ラベルを《 》，下位ラベルを[]で表記する。

質問1 鑑賞授業で身につけてほしい能力

75件の回答は大きく【鑑賞の仕方】と【鑑賞を通して身につけてほしい能力】に分類された。また「聴く」に関しては、[要素]や[要素や曲想の関わり]などに注目する《分析的な聴き方》を生徒に身につけてほしいと考えている回答が見られた。その中でも音楽を形づくっている要素を聴き取る能力に関する回答が多く、音楽を漠然と聴くのではなく、特定の要素を聴き取るような聴き方を生徒に身につけてほしいと考えていることが推測できる。

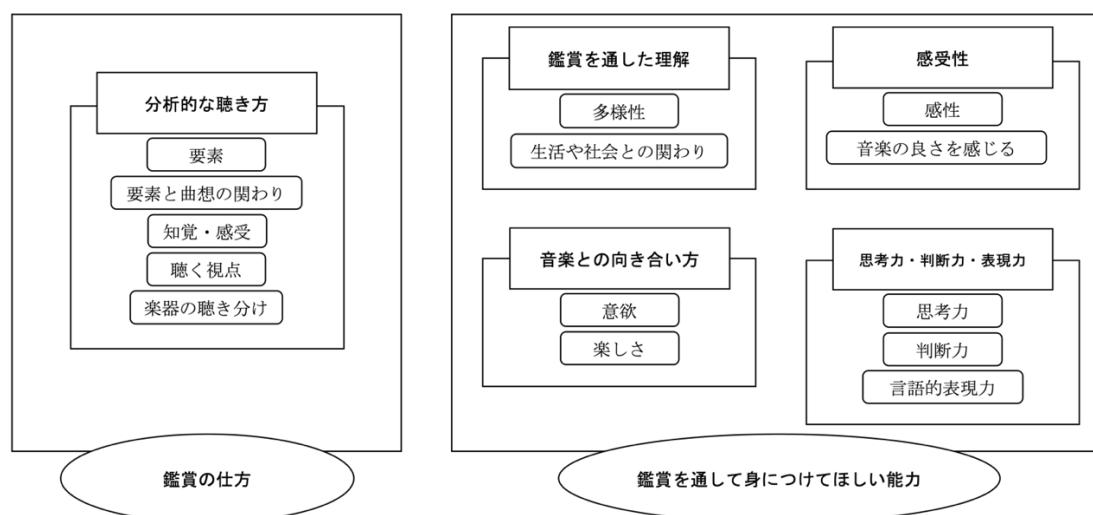


図1 鑑賞授業で身につけてほしい能力

質問3 鑑賞授業の構成

65件の回答は《感受性》《聴く》《活動の位置付け》《教師の働きかけ》《教材・教具》に分類された。また「聴く」に関しては、[聴き方][聴く時間][聴く回数]に関する回答が見られた。授業内で聴く時間をなるべく多く設け、何度も聴く機会を作るなど、鑑賞授業において「聴く」活動を中心に据えようとしていることが推測できる。また《活動の位置付け》の中でも[聴く活動の位置付け]に関する回答があり、授業の冒頭で聴く活動を取り入れ、そこから学習に結びつけるという回答が複数見られた。

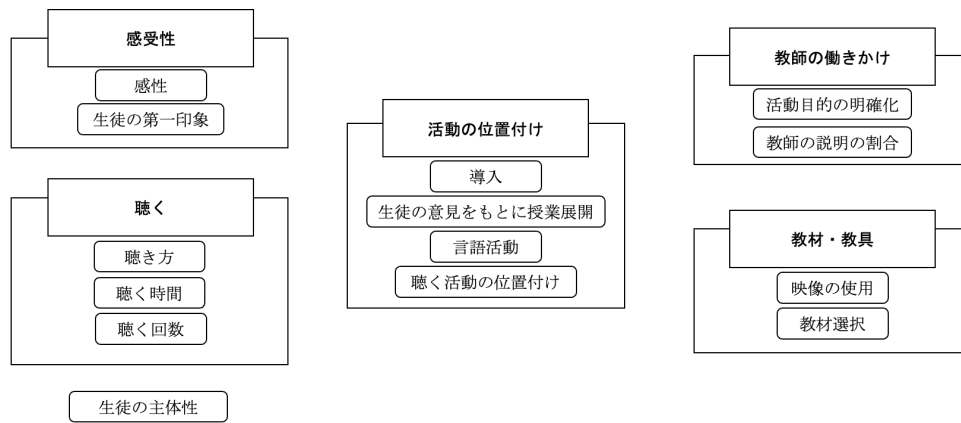


図2 鑑賞授業の構成

質問5 鑑賞授業における指導法

71件の回答は《教師》《生徒》に分類された。また「聴く」に関しては[聴かせ方]に関する回答が見られた。これまでの質問と比較し、「聴く」に関する回答は少なかったが、視覚情報を与えず聴くことに集中させる、比較して聴かせるなどの回答が複数見られた。

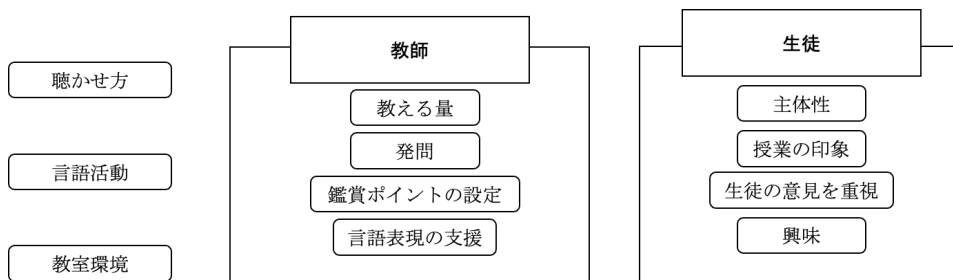


図3 鑑賞授業における指導法

質問6 鑑賞授業の良さ

68件の回答は《生徒の価値観》《活動》《曲》に分類された。また「聴く」に関しては《活動》の中で[聴く]に関する回答が見られた。その中では聴取に集中できるなど、聴くことを重視している回答が見られた一方で、[視覚的な学び]では、映像の使用によって生徒が興味を持てるといった回答があり、「観る」ことの良さを述べている回答もあった。

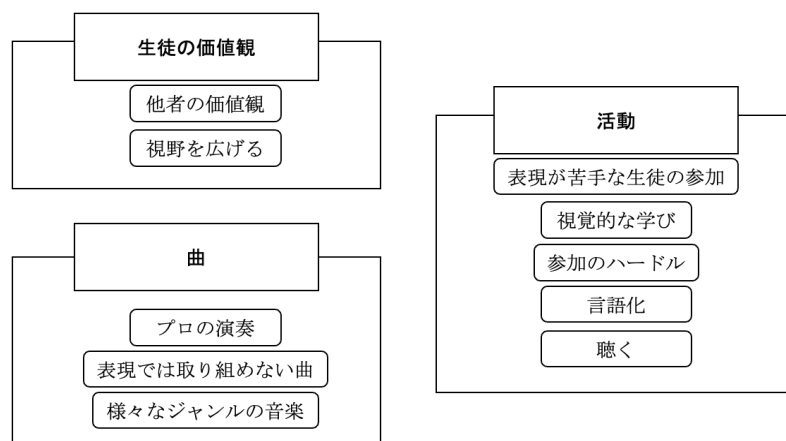


図4 鑑賞授業の良さ

質問7 鑑賞授業の課題

56件の回答は《生徒の能力》《生徒の意欲》《鑑賞の特性》に分類された。また「聴く」に関しては《生徒の能力》の中で[聴く力]に関する回答が見られた。その中では生徒の聴く力が身に付いていないこと、聴く活動が流し聞きになってしまうことが課題として挙げられていた。

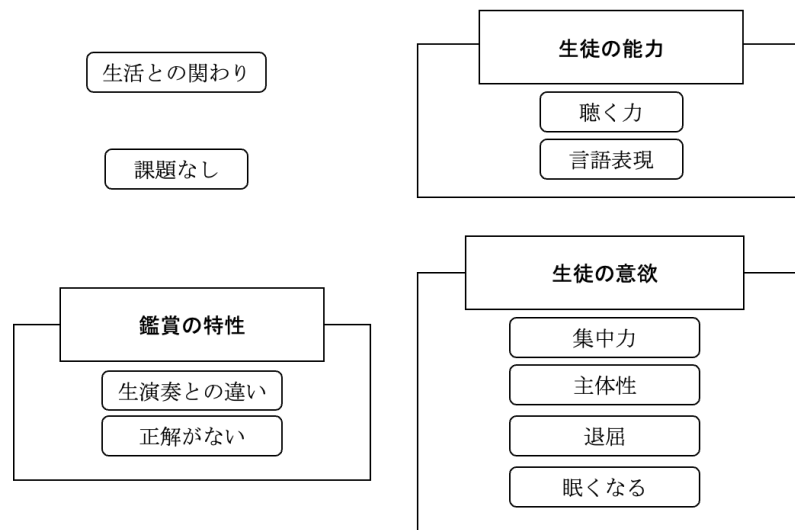


図5 鑑賞授業の課題

質問8 鑑賞授業の意義

74件の回答は《人生における音楽》《生徒の能力》《理解》に分類された。また「聴く」に関しては《生徒の能力》の中で[聴く力]に関する回答が見られた。その中の回答はいずれも聴く力・聴き方を身につけることができるという内容であった。

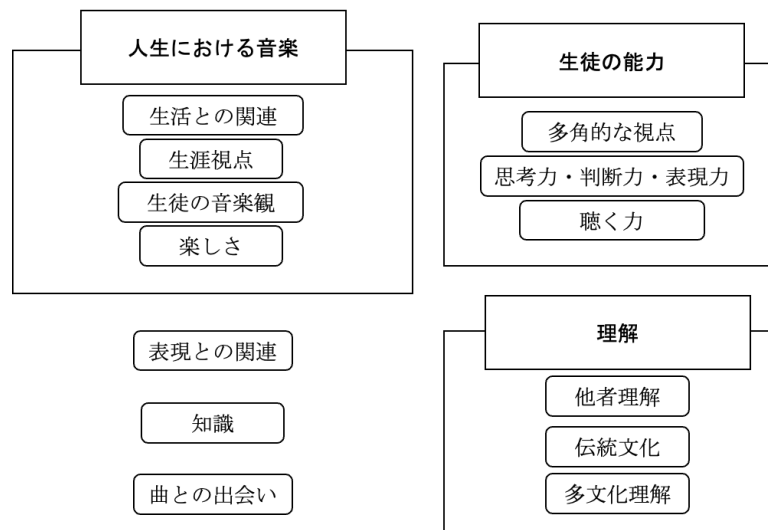


図6 鑑賞授業の意義

4 考察

質問紙調査の分析結果を踏まえ、鑑賞授業における「聴く」を教師がどのように捉えているのかをまとめる。

(1) 聴く対象「何を聴くか」

鑑賞授業を通して生徒に身につけてほしい能力として、分析的な聴き方が挙げられた。音楽を形づくっている要素の聴き取りや、曲想と音楽を形づくっている要素の関わりの聴き取りなど、音楽全体ではなく、音楽の要素に集中して聴くことを教師が重要視していると言える。このような音と音との関係性である形式や構成などの要素に注目した聴き方である「音楽を聴く」は多く見られた一方で、音を対象とした「音を聴く」はあまり見られなかった。回答の中で聴く対象として音を挙げているものは質問1の「楽器各々の音色」などに限られており、音は聴く対象として意識化されにくいと言える。

(2) 聴く方法「どのように聴くか」

鑑賞授業の構成として、授業内の聴く時間を多く設け、何度も聴く機会を作るなど、聴く活動を鑑賞授業の中で複数回行うことが重要視されていた。また、授業の導入に聴く活動を行い、そこから授業を展開するなど、聴く活動を授業内でどのように位置付けるかを教師は意識している。鑑賞授業における指導法として、視覚的な情報を与えずに聴くことが挙げられていた。反対に視覚的な情報を提示しながら「観る」ことが生徒の興味につながるという回答もあったが、それぞれの記述内容を見ると、「聴く」という語を用いた回答では集中させるために視覚的な情報をあえて取り除く方法を採用していることが示され、鑑賞の中でも「聴く」に特化した活動を授業内で取り入れていることがわかる。

こうしたことから、鑑賞授業では単発的な「聴く」ではなく別の聴く活動や授業で取り扱う内容と関連した「聴く」が行われており、「聴く」に特化した活動を行う際には視覚的な情報を排除することが有効だと考えられている。

(3) 生徒の聴く力

鑑賞授業の課題として、生徒の聴く力が身につけておらず要素に注目して聴けないことや、流し聞きになってしまうことが挙げられていた。また、鑑賞授業の意義として聴く力・聴き方を身につけることができるという回答があった。中学校段階では生徒の聴く力はあまり身につけておらず、鑑賞授業における課題と捉えられている一方で、その育成の役割を担うのは鑑賞授業だと考えられている。

(4) 「聴く」対象となる教材選択

鑑賞活動において聴く対象となるのは CD や DVD などであり、そうした教材選択の視点は聴く活動と深く結びついている可能性がある。そこで、鑑賞授業における教具・メディアについて尋ねた質問4の回答をまとめた(図7)。

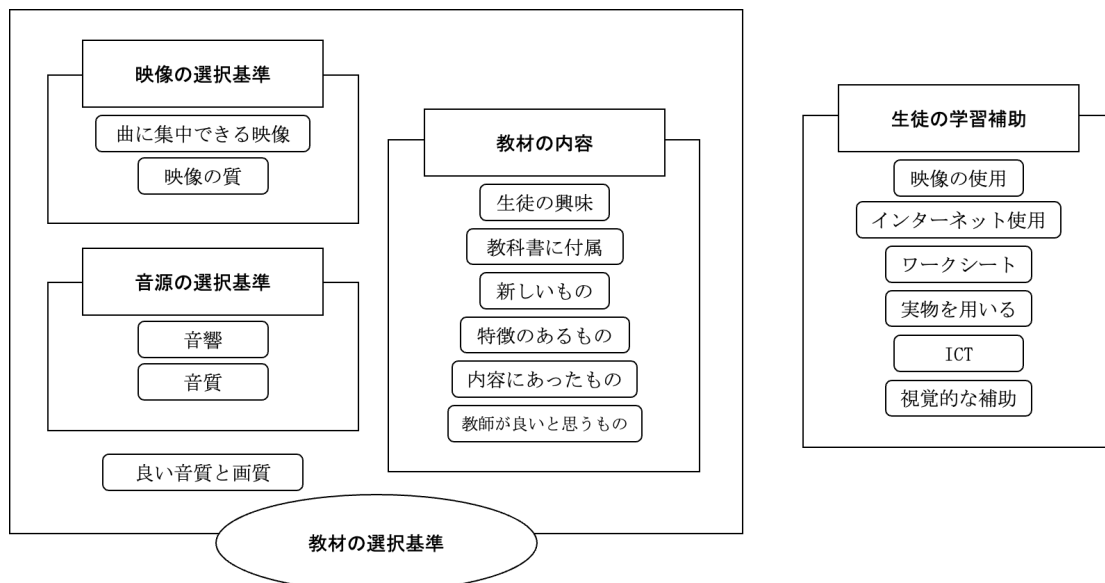


図7 鑑賞授業における教具・メディア

《音源の選択基準》の中には〔音響〕と〔音質〕に関する内容がある。〔音響〕では生徒が聴き取りやすい音響設備を用いることや、教室のどの席でも同じように感じ取れる音量設定にすることなどが挙げられていた。また〔音質〕はいずれも良い音質・音声を求めていた。こうした音源の選択において重要視されているのは聴きやすさであり、教具・メディアの選択においても「聴く」の影響が見て取れる。

5 総括

(1) 鑑賞授業における「聴く」

調査結果を踏まえ、中学校音楽科の鑑賞授業における「聴く」の特徴は以下の4点に集約される。

- ① 音楽を形づくっている要素に着目した分析的な「聴く」
- ② 授業内で何度も繰り返し「聴く」
- ③ 視覚的な情報を排除した集中的な「聴く」
- ④ 鑑賞授業で育成を目指す能力としての「聴く」

また、こうした「聴く」を行うために聴きやすい教具・メディアの選択がなされている。一方で、鑑賞授業の課題として生徒の聴く力が十分に身に付いていないことが挙げられており、教師の意識に反して授業内で聴く活動が充実したものになっていない可能性がある。中学生の聴く力がどの程度身についており、教師の目指す基準に達するまでどのように育成していくか、検討していく必要がある。

(2) 今後の課題

本研究では、鑑賞授業における「聴く」の実態を明らかにするために教師の意識に着目した質問紙調査を行ったが、実際の鑑賞授業においてどのような「聴く」活動を取り入れているのか実態は明らかにされていない。今後は授業観察など、他の手法を用いた調査も行う必要がある。また、実際の授業において生徒がどのような聴取を行っているか、教師ではなく学習者に着目をした研究を行い、実際の鑑賞授業における「聴く」の実態をより詳細に明らかにしていく必要がある。

引用・参考文献

- 穂田照子 (2009) 「「聞く」「聴く」「訊く」: 3つの「きく力」を育む取り組み」『Obirin Today: 教育の現場から』(桜美林大学基盤研究院) 第9巻, pp.197-214
- 小川昌文・加藤富美子・田邊裕子・木下和彦・塚原健太 (2014) 「「聴く」ことをめぐる理論的研究—身体・ポピュラー音楽文化・カリキュラム史の視点による音楽教育への示唆—」東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 平成25・26年度博士課程院生連携研究プロジェクト報告書, pp.1-11
- 川喜田二郎 (1986) 『KJ法—混沌をして語らしめる』中央公論社
- 今由佳里 (2013) 「音楽鑑賞教育に関する基礎的研究」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』第65巻, pp.49-54
- 阪井恵 (2006) 「音楽科教育は「音自体を聴くこと」をどのように考えてきたか—第六時学習指導要領(1989年・平成元年告示)までの状況—」『明星大学教育学研究紀要』第21巻, pp.110-122